真・恋姫†無双 短編集　転生者たち

便器詰まったときのカッポンてやつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双　短編集　転生者たち

【Ｎコード】
Ｎ３７２０Ｒ

【作者名】
便器詰まったときのカッポンてやつ

【あらすじ】
恋姫†無双の短編集です。
それぞれの話は独立した話です。

火之神の末裔（前書き）

―注意―

南蛮という名称は南方に住む異民族に対する蔑称であり、本来は自称に使うものではありません。

火之神の末裔

「はわわっ！桃香様、大変です！」

蜀地方を支配し悪政を敷いていた劉璋を、劉備たちが追い落とし蜀の乗っ取りに成功してから一年ほど経過した。群発的に起こっていた旧政権の残党の蜂起なども片付き、内政面でも初めのころは悪徳官吏の整理やサボタージュに四苦八苦していたが、今では安定してきている。

そんなある日。いつものように劉備が執務室で必死に執務を行っていると、扉を壊さんばかりの勢いで慌てた様子の諸葛亮が執務室に飛び込んできた。

「し、朱里ちゃん！？」

諸葛亮の剣幕に劉備は危うく筆を落としそうになる。

「朱里ちゃん、ひとまず落ち着いて！」

「そ、そうだよ朱里ちゃん。ちゃんと桃香様にご報告しないと…」

劉備は慌てる諸葛亮を落ち着かせようとする。諸葛亮の背中の影になっていたホウ統も、諸葛亮に落ち着くように言う。

「それで朱里ちゃん、何があったの？」

「はい、桃香様」

落ち着いた諸葛亮はあらためて劉備に事態を説明する。

「南部の益州で大規模な反乱が起きました」

諸葛亮は懐から一枚の書状を取り出す。それをおずおずと劉備に差し出し、

「さらに、その反乱の指導者である孟獲という人物が、自らを南蛮王と称して蜀に対して宣戦を布告してきました」

元々、蜀の南部には、劉備の傘下に入ることを嫌う豪族は大勢いた。しかし、彼らには反乱を起こしてもたいした利益は無く、そもそも反乱を起こせるほどの実力も無かった。中には高定（こうてい）、雍ガイ（ようがい）、朱褒（しゅほう）といった有力な豪族たちもいたが、どれも旗印となるには小物に過ぎた。

それらの理由から、彼女らは反心があろうとも表向きは劉備に従っていた。

そんなわけで諸葛亮もホウ統も、ひとまずは彼女らを放置し従来のまま統治させ、何かしらの問題を起こせばそれを口実に処断するという方針をとった。

しかし、それも孟獲という人物によって裏目に出てしまうのだが。

まさか、こんなに上手くいくとは。まぁ、反劉備勢力を説得して回った甲斐があるな。
俺は軍勢を率いて、益州にある城の一つに寄せている。今は城壁から北を眺め、いずれこの景色が全て俺たちの物になるであろうことを夢想し、悦に入っているところだ。端から見れば、高いところに登ってニヤニヤしている危ないヤツにしか見えないだろう。少なくとも俺なら、そんなヤツとお近づきになりたいとは思わない。
このために益州とは定期的に交易を行ってきたり、高価な贈り物をしてきたのだ。上手くいってくれないと困る。
何より、失敗してしまったら可愛い嫁さんに叱られちまうからな。

「にぃにぃ、準備はできましたにょ」

「あにしゃま、ミケも頑張ったにゃ」

「にい様、誉めてにゃ」

背後から聞き覚えのある可愛らしい声が聞こえる。振り向くと、そこには部下であるトラ、ミケ、シャムの三人が立っていた。
俺が三人の頭をそれぞれ撫でてやると、三人とも気持ち良さそうにうっとりとした表情を浮かべる。
なんというか猫耳や尻尾も相まって、ペットを撫でている気分になるな。
そう、南蛮族には何故だか猫耳と尻尾がデフォルトで装備されている。既に死別した俺の両親にも猫耳と尻尾は付いていたが、四十近い中年の男女に猫耳が付いている姿はシュールだった。
もちろん俺にも付いているが、何故か俺の場合は犬耳だった。犬耳は優秀な者にしか生えないという言い伝えがあり部族内では、幼

い頃から天才児だと持て囃され、今では部族で二番目に偉い立場になっている。だが、流石に恥ずかしいので頭には布をバンダナ状にして巻いている。

部下たちに指示しておいた命令、おそらくは攻めてくるであろう蜀の軍勢の迎撃準備が整ったという報告を受けて、俺は城壁から城内へ戻る。

通路を歩いて、謁見室まで行く。謁見室は今のところ仮の玉座として使われている。いずれは正式なものを作る予定だが。本当なら執務室にでも入って、執務をしてほしいのだが、あの子は中華風の飾られた謁見室をえらく気に入っているから、そこで執務を行いたがった。そのため、謁見室にわざわざ机などを運び込むはめになった。

謁見室の前にたどり着く。本来なら警備兼扉の開閉係として、兵士が扉の前に立っているのだが、何故だかそこには誰もいない。まったく…。おそらくは「そんなのいらないのにゃ」とかなんとか言って、兵士を外させたのだろう。

ここは安全な南蛮では無いし一応は元敵地なのだ。もう少し地位に見合った危機管理能力というものを身に付けてほしい。

「失礼します」

ノックなんて習慣は持ち合わせていないので、俺は一声かけてから扉を開け、謁見室内に入る。

室内に入った俺の目に飛び込んできたのは、中華風建築に南蛮風のコーディネートをした無国籍に模様替えをされた謁見室だった。

中華風の室内に所々に、名も知らぬ、しかしどうみても漢全土を探しても見付からないような極彩色の観葉植物。体長は三メートル

以上はあったであろう熊らしき生き物の毛皮の敷物。ペット代わりなのか、部屋の隅には二頭の虎が丸くなって寝ている。
そして、執務机に山のように乗せられた書類に、次々と判子をペタペタと押していく少女。
その少女の様子を見て、何度目になるだろうか、毎回口を酸っぱくして言っている台詞を、やはり今回も言わなければならない。

「こら、美以。書類はちゃんと読んで確認してから判子を押せと、何時も言っているだろう」

「にゃ！？祝融、いつの間に居たのにゃ？」

「声はかけたよ。それより、判子は書類を読んでから押しなさい」

「うぅ…。でも、全部祝融が最初に確かめてるんだから、みぃが読まなくても大丈夫にゃ」

「それでも、駄目だ。美以は大王なんだから。仕事はちゃんとしなさい」

この少女が俺の嫁さんの孟獲、真名は美以、一応は南蛮王なんだが。

「みぃは美味しい食べ物がいっぱい食べられるって、祝融が言ったから大王になっただけにゃのに。こんなに大変だなんて聞いてないにゃ！」

「わかったよ。なら今日は俺が腕によりをかけて、ご馳走を作るから。だからそれまで頑張れないか？」

「ホントかにゃ！なら頑張るにゃ！」

……我が嫁ながらチョロすぎる。

平原に広がる蜀の軍勢、およそ二十五万。その蜀の軍勢に向かい合うように陣取る南蛮軍及び反乱軍、およそ十万。

南蛮軍の圧倒的不利だ。　だが、あえて言おう。戦いは質だよ兄貴！

蜀の陣営に何か動きが見える。そろそろ動く気か？

「祝融さま。蜀が攻勢を開始しました」

物見の兵の報告が、俺の予想が当たったことを告げる。

俺は側に控えている、副官である兀突骨（ごつとっこつ）に命令を下す。

「兀突骨！まずは奴らをビビらせてやれ！」

「はっ！」

気持ちの良い返事を返した兀突骨は、自らバチを持ち、太鼓の膜が破れんばかりに力強く叩き鳴らす。

南蛮陣に攻め寄せる蜀の先陣の将軍は趙雲である。　彼女は嘲笑する。
数はこちらが二倍以上。しかも五虎大将軍と評される自分たちや呂布といった猛将たちと、臥竜と評されるほどの知恵者である諸葛亮。はっきり言って地方の反乱鎮圧には過剰過ぎるほどの戦力である。
それも反乱の芽を絶つためと、この期に南蛮を平定しようという意図からである。
この戦いには今後魏や呉を相手取る際の後方の不安を取り除く目的があるのだ。
その一国をも相手取れる軍を前に、寡兵でありながら平地戦を挑もうとは。敵はよほどの無謀者か阿呆だろう。
この時の趙雲に油断が無かったとはいえないだろう。
騎馬で趙雲が敵陣に飛び込む寸前、南蛮陣内から太鼓の音が響く。その直後、数千もの雷鳴ともつかない爆音が轟き、痛いほど趙雲の耳を打つ。すわ、文字通り青天の霹靂かと、趙雲は耳を押さえながら部下を見渡す。その爆音に脅えた馬たちが、騎手の命令を無視して暴れだし隣の騎馬とぶつかるもの、馬がその場で棒立ちになり振り落とされるものと戦う前から蜀の前衛は混乱状態だ。
「いかん！このままでは！」
趙雲が焦り、直ぐ様この恐慌状態を何とかせねばと指示を出そう

とした刹那、南蛮陣内から、馬を遥かに越える体長を持ち、長鼻の灰色の生き物数百頭がその巨体を揺らしながら恐慌状態の蜀前衛を蹴散らしていく。さらにそこに精強な南蛮兵たちが襲い掛かる。
蜀と南蛮の戦いの初戦は南蛮の誇る戦象部隊が、蜀前衛を大いに破った。

まさか、こんなに上手くいくとは思っても見なかった。あまりに上手くいきすぎて、敵のこの敗走が擬態ではないかと疑っているほどだ。
俺たちがしたことは策と呼ぶのもおこがましいことだが、接敵直前に象たちを鳴かせて、その鳴き声に馬が脅えた瞬間に戦象部隊による突撃を敢行するというものだ。
馬は臆病な生き物だ。象という未知の生き物の鳴き声であっという間に恐慌状態になる。こちらの馬たちは象に慣らしてあるから平気だ。
象は牙くらいしか武器はなく、性格も温厚だ。さらには一頭につき、三十人分の食糧を消費するため、兵站にかなりの負担がかかる。
だが、それら全ての欠点を塗り潰してしまうほど象は強い。
その圧倒的な体重で疾走したときの破壊力は、たとえ隊列を組んだ重装歩兵であろうとも吹き飛ばしてしまう。その頑丈な皮膚は弓矢を弾き、刀槍ではかすり傷程度しか与えられない上に、速度は下

がるものの象鎧という象を守るための人間でいう鎖帷子(くさりかたびら)を着込んでいる。
まさに象は、この時代における戦車といっても過言ではない。無論、戦車といってもチャリオットの方ではなくタンクの方だ。
この時代の兵器では、せいぜい遠巻きに弩や投げ槍で攻撃をし続け、いずれ出血死するのを待つくらいでしか象には対抗できない。犠牲を覚悟に、象が身動きを取れないほど肉薄し、その突進力を無力化することも出来る。
だが、たとえ諸葛亮などの軍師がその戦法を思い付いても、犠牲を前提にしたそのような作戦を似非仁君の劉備がよしとするとは思えない。
敵も大したもので、恐慌状態にありながら一部の部隊はすぐに規律を取り戻し、こちらにも被害が出た。おそらくは敵将―旗印や密偵の報告からすると趙雲だろう―の直接指揮を取る部隊だったのだろう。
幸い大した被害ではなく、象に至っては一頭も欠けていない。
副官の兀突骨が訊ねてきた。

「どうやら敵はしばらくは守りを固めて様子を見るようです」

「奴らには、いったん退くという選択肢は無いだろうな。下手に長引けば、魏と呉が良からぬことを仕掛けてくるやも知れないからな」

こちらとしても、両国に蜀を攻めてもらえばだいぶ楽になるからな。そっち方面の調略ももちろんしているが、どちらも様子見ってところだろうな。まぁ、敵に回らなければ御の字だ。

「それではこちらからは打ってでないのですか？」

既に益州のほとんどを押さえ、本国からも次々と物資が送られて

きているこちらと、今では敵地となった場所に遠征してきており、周辺諸国の動向にも注意しなければならない蜀。
本来ならこちらとしては持久戦に持ち込めれば、有利なのだが。
「いや、水に落ちた犬は、この際だから徹底的に打ち据えるべきだ」
「では…」
「木鹿王(ぼくろくおう)を呼んでくれ。猛獣部隊を使う」

たった一人のイレギュラーの存在により、本来なら有り得なかった外史が誕生する。
「ムシロ売りの成り上がりに火之神の末裔の力を見せてやる！」

火之神の末裔（後書き）

諸葛亮

ご存知、ＢＦ団のＮｏ．２。口癖は「ほかにすることはないのですか」。普段はリ・ガズィだが本当はνガンダム。
演義では奇策を用いるイメージが強いが、むしろ慎重で正道を好み、勝てるときにしか戦わなかったため、チャレンジャーな魏延とはよく対立していた。
有能論や無能論があり、後世の評価はかなりの両極端である。
身長は１８０～１９０ｃｍあり、嫁さんがブサイク。歴史に残るほどだから余程のブサイクだったのだろう。
臥竜、つまりは本気を出したら凄いらしいが多分正史では本気を出さなかったのだろう。本気を出せば手にした扇からビームを放ち、呂布や本多忠勝にも勝てる。

麒麟児

俺の名前は田中大和（たなかやまと）。俺はかつて、平成の時代の日本という国に産まれ育った。

しかし、大学二年生の春、トラックに轢かれそうになった美幼女を救うため、道路に飛び出した。

気付くと俺は三国時代の中国に転生していた。

俺の父は、俺が物心つくまえに、漢に侵攻してきた騎馬民族との戦いで命を落とした。その後は、母一人子一人の母子家庭で暮らした。

若く美しい母には、親族から再三、再婚話が出た。しかし、母は亡き父に操をたて、全て固辞し続けた。

そんな母に楽をさせたいと思い、官吏に成るため、俺は猛勉強をした。

母の手伝いもしつつ、学業も怠らない。しかも、転生者であるため、生前の知識を使い、一を聞けば十どころか五十も百も理解した。近隣では天才と評判だった。

さらに、母の為に、少しでも金を稼ごうと、千歯扱きや備中鍬（どちらも農具）のアイデアを、大工や鍛冶屋に伝え、売り上げの一部を貰う契約をした。他にもジェンガやオセロ、人生ゲームといった娯楽品を作り、あっという間に、親子二人、一生遊んで暮らせるだけの財産を手に入れた。

いつの間にか、俺は『麒麟児』と呼ばれるようになっていた。

、この乱世では金持ちは狙われる。大きな街に引っ越し、豪邸を

建て、兵を雇って警備をさせ、のんびり暮らそうと思ったが、母から「就職くらいしないと嫁の貰い手がない。」と言われ、城に出仕することにした。マザコンとは言わないでくれ。今の時代は思想的に、全員マザコンみたいなもんなんだ。

麒麟児の評判と、亡き父の功績により、瞬く間に出世し、太守である馬遵（ばじゅん）様の右腕と呼ばれるまでになった。

そんな折、南方より敵が攻めてくるとの報があった。

どうやら敵は大軍のようだ。あっという間に、城は包囲された。敵軍は、文字通り桁違いの数だが、城は揺らぎもしない。

こんな時の為に、馬遵様に進言し、城は、高い城壁、深く水を湛えた堀、精強な兵達（我が家の私兵も多数加わっている）。何より、手前味噌だが、俺の開発した『元戎（げんじゅう）』と名付けた連弩―従来のものより威力、連射性が格段に上―の前には手も足も出ないようだ。

「どうしてこうなった。」

俺は縄を打たれ、敵将に囲まれている。敵の大将が俺に会いたがっているようだ。

偵察する為、城を離れた隙に、俺が裏切ったという噂が流れ、城に戻ろうとすると、味方から攻撃を受けた。城にも帰れずウロウロしていたところを敵に囲まれ、降伏した。

奴等は、俺の評判を聞き、引き入れたいようだが…、どうやら敵

の大将が着たようだ。俺の後ろに立つ衛兵が無理矢理俺の頭を下げさせる。

「貴方が実質的にあの城の指揮を執っていたようですね。既に天水の城は陥落しました。我が軍は貴方の才能を惜しみます。降る気はありませんか？」

顔も上げず、俺は答える。

「生憎と二君に仕える気はない。」

「どうしてもですか？」

「くどいぞ！！男に二言は…」

ない！！と頭を上げつつ、敵将の顔を見上げると

「……か、可愛い。」

「はわっ！？」

「姓は姜、名は維、字は伯約、真名を大和と申します！！今この時より我が智を貴方に捧げます！！」

「はわわっ！？」

こうして俺は、生涯を捧げるに足りる美幼女を見付けたのだった。

麒麟児（後書き）

趙雲

趙雲は、かつて公孫さんに仕えていたが、後に、劉備に仕えることとなる。主君を変える将は多かれ少なかれ後世から批判されるが、演義の主役級である劉備の臣下になったので肯定される。
彼の逸話で有名なものといえば、『長坂の一騎駆け』だろう。阿斗（後の劉禅）を懐に抱え、魏の大軍の中を駆け抜けた。後世の画家達が彼を描くときは、決まったように赤子を抱えた白い美丈夫を描く。
五虎大将軍（五虎将軍）では一番地位が低い実は魏延よりも地位が下であった。
武器は３ｍある長い槍。
また、彼は夜な夜な、裸に近い格好に蝶の仮面を付けただけの出で立ちで、錬金の戦士達と戦っていたとかいないとか。

仮病ニート

「働きたくないでござる。」

冒頭からダメ人間発言をした男の名は司馬懿、字は仲達。一応は数々の高官を輩出した名門、司馬家の次男だ。

彼には兄が一人、弟が六人いる。その全員が優秀で、彼を合わせた八人全員の字に「達」の文字があることから「司馬八達」等と世間では評判である。

しかし、司馬仲達はニートである。

かつて、彼は平成の時代の日本で、東大を目指す受験生であった。幼い頃から英才教育を受け、高校三年になる頃には、東大合格確実とまでいわれる程になっていた。

しかし、センター試験当日に、飲酒運転のトラックに轢かれ、目が覚めると彼は司馬仲達になっていた。

生前、人生の全てを勉学に注ぎ込んだ司馬懿は、幼くして天才の名をほしいままにしたが、やる気というやる気を、前世で使いきってしまったことと、名門としての贅沢な暮らしが、彼のニートとしての才覚を開花させるのだった。

兄はおろか、弟たちも皆、次々とエリート一族というに相応しい職に就いていっているというのに、未だに司馬懿は無職であった。

彼は、酒を呑むでもなく、女遊びをするでもなく、部屋で読書したり、四阿(あずまや)でのんびりと茶を飲んで暮らしていた。
本来なら、穀潰しもいいところであるが、彼のかつての神童と呼ばれていた時代を知るものは、「かつて、周の呂尚(りょしょう)は文王が訪れ仕えるよう言ってくるまで、川に針を付けぬ釣糸を垂らし、待っていた。司馬懿も、自らが仕えるべき名君が訪ねてくるのを待っているのだ。」と太公望が聞けば草葉の陰で怒るであろう、とんでもない勘違いをしているのであった。

ある日、そんなニートに来客があった。

「私の名は曹孟徳。単刀直入に言うわ、司馬懿、私に仕えなさい！！」

ニートの（誤解に基づいた）噂を聞き付け、覇王が直々にスカウトに来たのだ。

「（不味い。人使いの荒いらしい曹操なんかに仕えたら過労死してしまう。でも、断ったら後が恐いし、）じ、実は、私は風邪を引いておりまして、とても職務には耐えられそうにありません。」

「そう、なら風邪が治った頃にまたくるわ。」

「（しまった、もっと重病にしとけばよかった！！）」

そうして、司馬懿に仮病で断られた曹操は、ことあるごとに、司馬懿を訪れるのだった。

ある日は

「ねぇ、司馬懿今日は「今日は肺炎でして」あら、そうなの。」

また、ある日は

「ところで今「偏頭痛です」そう、わかったら。」

曹操は、司馬懿が仮病を使っていることには、とうに気付いている。しかし、司馬懿との世間話の中に、「もっと効率の良い製塩法」や「火薬を使った兵器」、「株式会社」など自分すら思いもよらないアイデアが次々と出てくるので、暇を見つけては司馬懿の下を訪れる。

やがて、お互いにだんだんと惹かれ合い、後に、二人は夫婦となるのだった。

「どうしてあのような男と！！」
「春蘭！！あの変態に目にもの見せる策を考えたわ！！」

この世界の司馬懿の敵は、蜀のはわわ軍師ではなく、内部にいるようだ。

仮病ニート（後書き）

劉備

言わずと知れた蜀の皇帝。演義では主役ともいえる活躍ぶりである。彼は幼い頃から「俺は劉邦の末裔だからいずれ、皇帝になってやる」と言い、周りの大人をヒヤヒヤさせていたそうだ。
彼はとても美容に気を使っていたことでも有名であり、運動不足で、太ももに肉がついたことを嘆いていたという逸話からも、その事が読み取れる。また、彼が年間辺りの日照日が少ない蜀に国を構えたのも、ＵＶを気にしてのことであろう。
そんな彼は、合法幼女である諸葛亮の自宅を幾度となく訪れ、自らにつかえるよう迫ったそうだ。この事から、劉備がロリコンであり、ストーカーでもあったことは疑いようもないだろう。

文盲の忠将

「駄目だ……さっぱりわからん。」

山中にある、蜀の陣中。その中にある天幕の中で竹簡を持った30代くらいの男はひとりごちる。

男の名は王平、字は子均。彼は現在、蜀の一軍の副将を任されている。

諸葛亮による、北伐（魏への侵攻）が始まり、序盤戦は先手を取った蜀の優勢だった。しかし、魏の張コウは、蜀の進軍の拠点が街亭であることを見抜き、大軍を以て、街亭を攻めんとする。

それを迎え撃つ蜀の将軍は、諸葛亮の愛弟子ともいえる馬謖だ。今回、王平は馬謖の副将として、実践経験の浅い馬謖を補助するように命じられた。

王平はもともと、魏の将軍だった。しかし徐晃の副将を務めていたとき、徐晃の不興を買い、危うく諸兄されかけたため、慌てて蜀に亡命してきたのだ。

「（演義でもそんな感じの話があったから、怒らせないように気を使ってたんだがな～）」

例に漏れず、転生者である彼は、演義での徐晃との仲違いを知っているため、徐晃の不興を買わないよう細心の注意を払っていたつもりだった。
しかし、その腫れ物に触るかのような態度こそが、徐晃の不興を買ったことを彼は未だ気付いていない。

「誰か在るか？」

「はっ。将軍、ご用件は？」

天幕の入り口に控えていた衛兵は王平に応える。

「この竹簡の文字を読んでくれ。」

原作での王平は文字をほとんど読めなかったそうだ。その原作知識を持った、この世界の王平は懸命に文字を習得しようとしたが、全くといっていいまでに、身に付かなかった。けして知能は他人に劣るものではないのに、何故だか文字だけは覚えられなかった。今では、「歴史の修正力とか、なんかそんな感じのだろ」と諦めている。

「竹簡の内容は諸葛亮様からのご指示で、『給水路を絶たれるので山頂には布陣しないでください。』だそうです。」

「……そうか。」

うろ覚えになった原作知識を探り、たしかこの命令を馬謖が無視して北伐が失敗するんだよな、と考える。

「（また、原作変えようとしても無駄かもしれんが、）助かった、任務に戻ってくれ。」

「はっ。」

竹簡を読んだ衛兵に声を掛け、王平は馬謖のいる天幕へと歩いていく。

「馬謖殿。」

「えっ！？お、王平殿ですか！？」

王平が馬謖の天幕に向かい、声を掛けると、中から若い女性の上擦った声が返ってくる。

「入ってもよろしいか？」

「どっ、どうぞ。」

天幕には、可愛らしいが、やや気の強そうな少女しか居なかった。その少女、馬謖に勧められ、王平は、天幕内に備え付けられた椅子に腰掛ける。

「馬謖どの、諸葛亮殿の命令は届いているはず。なぜ、陣を動かさ

ないのですか？」

何やら期待するような表情を浮かべていた馬謖は、王平が仕事の話をしに来たと分かると、やや不愉快そうな表情になり、

「遠方に居られる丞相では戦場の状況が掴めようはずがございません。この軍の指揮官は私（わたくし）です！！」

王平は内心で、嫌な予感が当たったことに、嘆息する。

それでも、一応の説得は続ける。

「それでも諸葛亮の命令が優先されます。仮に命令を無視して買っても、処罰されるでしょう。」

「ですが！！」

「私は貴女を心配して言っているのです。」

「ふぇっ！？」

何やら馬謖の様子がおかしいので、少し恩着せがましい言い方だったかな、と王平が思っていると

「お、王平殿はそ、そんなに心配なのですか？」

「？え、ええ、勿論です。」

「そうですか…。（そっか、心配してくれてるんだ）」

王平の言葉を聞いてから、何やらニヤニヤとし始めた馬謖は、自

分を訝しげに見る王平に気付き、

「ま、まぁ、丞相の命に逆らうわけにもいきませんし、すぐにも陣を動かしましょう！！」

頬を赤らめた馬謖を見て、王平は、怒らせてしまったかと思ったが、説得自体は成功したようなので良しとすることにした。

「それと！！今後は私のことを……ま、真名で呼んでもよろしいですわ！！」

諸葛亮の指示通りに陣を敷き、馬謖らは、張コウの大軍から街亭を守りきった。

そして、街亭を拠点とし、蜀の大軍が魏に攻め込み、魏は滅びた。

それを知った呉も、蜀に降伏し、大陸は蜀により、統一された。

この外史の運命を変えた力が、天の御遣いでも、転生者でもなく、一人のツンデレ少女の恋心だったことは誰も知らない。

文盲の忠将（後書き）

曹操

彼はまさにパーフェクト超人と言っても過言ではないだろう。文武に優れ、音楽や詩歌にも精通していた。
そんな彼だがドジっ子の側面も持っており、彼をもてなそうと、料理の準備をしているのを自分を殺す気だと勘違いしたことがある。
また、大好きなミカンを食べようとして、ミカンの皮を剥いても、毎回、中身が入っていないという可哀想な人物でもある。
彼は女好きとして有名だが、ことあるごとに、「関羽が欲しい」と言っていたことから、本来はＢＬ、それもヒゲフェチであったのだろう。しかし、曹操のラブコールに関羽は応えず、一度は曹操の手元に来たのにおわずけを喰らわされる。それがトラウマになり、以来、曹操は関羽を見る度に「げぇっ、関羽っ！！」と叫ぶようになった。

乱世のアイドルマスター

「今日は私たちのらいぶに来てくれてありがとー！！」

冀州のとある街の近くに特設会場が組まれ、そこでは、三人組の少女が歌を披露していた。観客は一万人をゆうに越えているだろう。おそらく近隣の街や村から、彼女達のらいぶを見るためだけに、訪れた者も数多くいることだろう。

「みんな大好きーー！！」

『てんほーちゃーーーん！！』

「みんなの妹」

『ちーほーちゃーーーん！！』

「とってもかわいい」

『れんほーちゃーーーん！！』

彼女達は実の姉妹である。長女の張角、真名は天和（てんほう）。次女の張宝、真名は地和。三女の張梁、真名は人和（れんほう）。

この張三姉妹は、旅芸人として、『数え役萬☆姉妹（かぞえやくまん・しすたぁず）』を名乗り、各地を興行して廻っている。

「みんな～！！次のちぃ達のらいぶにも来てね～！！」

今回のらいぶも、大盛況の内に無事終了し、三姉妹は笑顔で楽屋に戻っていく。
実は彼女達は、かつては全く売れない旅芸人であったのだが、

「それもこれもぜ～んぶ馬元義さんのお陰だよね。」

天和の言葉に妹達もしきりに頷く。
彼女達がここまでの人気芸人に登り詰めたのは、彼女達の実力は勿論のこと、その魅力を十二分に発揮させ、それどころか、何倍にも発揮させることの出来る名プロデューサーの存在があったからだ。
その名は馬元義。
馬元義は、もとは平成の時代の～～中略～～馬元義として転生したのだ。
馬元義はとある街で興行していた三姉妹を見たとき悟った。自分が二度目の生を与えられたのは、彼女達をスターにする為なのだと。

「馬元義さん、今日のらいぶの出来はどうでしたか？」

天和は楽屋に入るや否や、そう訊ねた。すると、楽屋で三人を待っていた男は答える。

「もうパーデキよパーデキ！！三人ともとってもキュートでビューティーでエレガントだったわん。」

三人を待っていた男…いや、漢女は天和の質問に間髪入れずべた褒めする。
上半身は裸で、下半身にはレザーのホットパンツ、髪型はアフロヘアーで、口には真っ赤なルージュという、個性的に過ぎる姿をした彼（彼女？）こそが名プロデューサー、馬元義である。

「三人のキュートならいぶを見てたら私のインスピレーションがビンビンにはんのうしちゃったわん。あらやだ！！ビンビンなんて！！私ったらはしたない！！」

始めの頃は、馬元義のアドバイスを胡散臭く思っていた三姉妹だが、彼女のお陰であっという間に売れっ子になり、今では馬元義に絶対の信頼を置いている。

「次のらいぶのことなんだけど、天和ちゃんが「大変です、馬元義様！！」あら、どうしたの波才ちゃん？」

三姉妹のヘアスタイリストを務める女性、波才が慌てた様子で楽屋に駆け込んできた。

「一部の信者（熱狂的ファン）が暴徒化して官軍と衝突しました！！」

「なんですってー！！」

―討伐軍―

「何進将軍大変です！！先発の朱儁、皇甫嵩の軍が全滅しました！！」

「なんだと！？賊徒ごときにやられるとは！！それで敵の数は？」

「そ、それが…」

「早く言わんか！！」

「て、敵はオカマが一人です！！」

「そんな！？春蘭と秋蘭が二人がかりでも勝てないの！？」

「やっぱり、こっちでは曹操ちゃんも美少女なのね～。」

「どんなに可愛くてもこの強さ。やっぱり呂布ちゃんはあの呂布なのねん。」

「……こいつ、恋より強い。」

「けどあんまりオイタが過ぎると駄目よん。」

ここに、真・恋姫†無双～漢女大乱～が幕をあける。

乱世のアイドルマスター（後書き）

周瑜

イケメンＢＬ。
言うまでもなく、孫策の恋人である。二人の愛は金も断てる程であり、二人の心のレッドクリフには恋の東南の風が吹き荒れ愛の連環計は燃え尽きる程であった。
勿論孫策、周瑜がそれぞれ、大喬、小喬と結婚したのは偽装結婚だというのは、公然の秘密である。
諸葛亮にやたらと突っ掛かっていっては吐血ばかりしていた。

五斗米の名医

時は後漢、場所は蜀と呼ばれる地方。後に劉備によって支配されるが今はまだ劉焉の勢力圏である。

蜀にあるとある小さな村。特産品等はとくになく、村人は皆農業を営み、細々と暮らしている。

しかし、その日はいつもとは違った。

村のあちこちから煙が上がり、うめき声が響き、むせかえる程の強い血の臭いが一面に広がっている。

村は数刻前、盗賊の襲撃を受けたのだ。幸いなことに、盗賊たちにとっては不運なことに、近くで演習をしていた官軍が即座に助けに駆け付け、盗賊達は一人残らず殺されるか、捕えられるかした。しかし―

「……うぅ……」

「痛ぇよ、チクショウ！！」　官軍はほとんど無傷だったが、彼らが駆け付けるまでの間に、多くの村人が傷付いていた。奇跡的に死者はいなかったが、怪我人が多数と、重傷者が一名おり、翌朝には生き絶えているであろうことは、素人目にも明白であった。

「お父さんしっかりしてよ！！すぐにお医者様がこんな怪我治してくれるよ！！」

大怪我を負った父親に、息子であろう少年がすがり付く。しかし、この小さい村には常駐の医者は居らず、近くの街から呼んでも二日はかかるだろう。また、呼んだところで助かろうはずもない。

「ボウズ。残念じゃが君のお父さんはもう…」

「やだやだやだ！！お父さんが死んじゃったらボク一人になっちゃうよ！！」

幼い頃に母親を病で亡くした少年はたった一人の肉親を今まさに失わんとしていた。

村を守るために傷付いた彼の死を皆が覚悟していた。その時―

「怪我人か？」

重傷の父親の側で、そう呟いた男を見上げた少年は驚いた。

その男の姿は「黒」だった。全身、靴まで黒い衣服を身に付け、さらに黒い外套を掛け、手には四角い丈夫そうな黒い鞄を持っている。髪は黒いが一部が白髪であり、不気味な印象を受ける。だが、何より目立つのは彼の顔にある、まるでツギハギのような傷痕、その傷痕を境に肌の色が異なっていた。

こんな男は村で見たことが無いので旅人だろう。

「その男はもう長くない。今晩にでも死ぬだろう。」

「そんなことない！！お父さんは絶対に元気になるよ！！」

あまりにも冷たい男の言い草に、少年はカッとなり、言い返す。

「……私が治療してやろうか？」

「えっ？」

「私は医者だ。」

「！！！！それなら―」

不気味な男が医者だと知り、それなら父を助けてくれと少年は言おうとした。

「ただし治療費は一万銭だ。」

「なっ！？」

その話を聞いていた村人が思わず声をあげる。

「そんな大金を子供が払えるわけ「払います！！」」

少年が医者に向かって言う。

「何年何十年かかっても絶対に払います。だから、お父さんを助けて！！」

その言葉を聞いた医者は小さく微笑み、

「その言葉が聞きたかった。」

その後に起きたことはその場にいた誰にも理解が出来なかった。男が重傷の父親を小刀のようなもの（メスと言うらしい）で切りつけたり、まるで裁縫でもするかのように糸と針で傷を縫い付けたり。気が付いた頃には父親の出血は止まり、頬には赤みがさし、ダレもが助かることを確信した。

少年が医者に言う。

「お代はすぐには出せませんが絶対に「要らん。」えっ！？」

「お前さんの覚悟が聞きたかっただけだ。金は要らん。その代わり、米を五斗（約１０リットル）払ってくれればいい。」

これがかつて現代の日本で神の手と呼ばれていた転生者、張魯と、その弟子となる少年、華陀の出会いだった。

五斗米の名医（後書き）

（ある意味で）三国志一の非業の将　陳到

蜀には史官（歴史を記録する係）が存在しなかった。（そのため蜀を国と認めない研究者が多数存在する。）なので陳到の情報はほとんど謎に包まれている。そのため陳到には列伝が存在しない。

劉備が豫州刺史をしていた頃からの古参の将。劉備、劉禅と二代に仕えた。なのに影が薄い。何故なら列伝がないから。
その忠誠心を楊戯に評された。なのに影が薄い。何故なら列伝がないから。
夷陵の戦いの後、呉との最前線である永安都督征西将軍に任ぜられるほど、信頼されていた。なのに影が薄い。何故なら列伝がないから。
趙雲に並び評されるほど武勇に優れ、忠義にあついと言われていた。なのに影が薄い。何故なら列伝がないから。
ちなみに三国志演義では居なかったことになっていて、陳到の名は一切出てこない。
何故なら列伝がないから。

熱血ネゴシエーター

涼州において行われた馬騰と曹操の戦いは、曹操が終始優勢のまま進んだ。そして、曹操があと僅かで勝利を掴もうとしていたとき、かねてより病を患っていた馬騰は娘の馬超と姪である馬岱に看取られ逝去した。

曹操にとっては、甚だ不満の残る戦いであった。馬騰の文武における有能さは、人材を重んじる曹操にとって、欲して止まないものであった。その娘の馬超や姪の馬岱も一軍の将足る器であり、同様に曹操は欲した。

曹操は、その人材のいずれもが手に入らないことが不満ではあった。しかし同時に、もはや実権を失い付き従う者が居なくなった漢王朝に、愚直なまでに付き従う馬騰の姿は、曹操にとって好ましいものであった。

己の手に入らないのであれば、堂々とした戦にて馬騰たちを打ち破ることこそが、彼らへの敬意の払い方であり、また己が覇道に相応しい。曹操はそう考えていた。

その結果がこの有り様では、かけた労力に対して実りが少なすぎる。

涼州を手に入れただけでは満足できないことこそが、この少女の覇王たる所以であろう。

「春蘭、秋蘭！」

『はっ！』

曹操は、腹心である夏侯惇・夏侯淵を呼ぶ。

「馬騰を部下にする事も、戦で勝利する事も出来なかったわ」

「しかし、華琳様―」

確かに明確な勝利、例えば敵大将の馬騰の首級を挙げたり、敵の降伏などがあったわけではない。しかし、結果的に我々は涼州を手にいれ、馬騰は死に、馬超や馬岱は逃げ出したのだ。

その物言いに夏侯淵はやや控えめに反論をしようとする。

「秋蘭、貴女が言いたいことは分かるわ。でも私自身がこのような決着に納得していない。それだけで理由には充分。そうでしょう？」

曹操は夏侯惇・夏侯淵両将に命じる。

「馬超、馬岱の二名を私の前に連れてきなさい。困難であるなら生死は問わないわ」

僅かな手勢のみを引き連れ、馬超は従妹の馬岱とともに曹操の追撃から逃げている。

だが精強な涼州産の馬といえど、長期間の逃避行には耐えられず、配下の兵からは今にも脱落者が出そうな雰囲気である。

疾走する馬上から、馬岱は馬超に話しかける。

「もう、お姉さま。蒲公英（たんぽぽ）はお姉さまみたいに脳筋じゃないんだから、そろそろ休憩でもしないと倒れちゃうよ」

「……そうだな」

馬岱（蒲公英）は軽口を叩く。冗談めかしてはいるがそれが兵たちを気遣ってのことだと分かっている馬超は、兵に今日はここまでにする旨を伝え設陣を命じる。

「ところでお姉さま」

「どうした？蒲公英」

「曹操から逃げ切ってもその後はどうするつもりなの？」

陣内で馬岱は問いかける。

「それなんだが……」

馬超は言い澱む。

「ついてきてくれた兵を養わないといけないからな。どこかに身を寄せるしかないだろうな」

「それなら劉備の所か、孫権の所だね」

「だよな」

この時期に曹操に匹敵する勢力を持つものはその両者くらいだろう。

「それでお姉さまはどっちにするの？」

「地形的には劉備の方が近いんだけど、あそこはまだまだ弱いからな。曹操に復讐するより曹操に潰される方が早そうだ。かといって孫権の方は遠すぎるからな」

「蒲公英は孫権さんのところでいいと思うよ。劉備さんのところはやっぱり弱すぎるよ」

「……そうだな。よし、孫権の所に身を寄せよう」

二人が話していると、部下の一人がやって来て報告をする。

曰く、劉備からの使者が来たそうだ。

「わかった。ここに呼んできてくれ」

「はっ」

その部下が下がると、すぐに別の部下が一人の男を連れて来た。

「はじめまして。私は李恢（りかい）と申します」

その男は文官の格好をしているものの、かなりの長身で、服の上から見えずとも分かるほどの筋肉質な体つきであった。

そして、その顔に浮かぶ笑顔は、さわやかを通り越して暑苦しさすらを相手に与えるものだった。

馬超は言う。

「使者どのは我らを劉備どのに説得しに来たのだろう。だが残念ながら、ちょうど我らは孫権どのの下に向かおうと決めたところだ」

馬超がそう切り出した。

李恢は黙って聞いている。

「別に劉備どのに含むところがあるわけではないが―」

「駄目駄目駄目駄目駄目っ！そんなんじゃ駄目！全っ然分かってないね、君！」

「へ？」

突然、李恢が熱く語り出しだ。

「気の無い返事は止めろ！」

「は、はい！すみません！」

状況が未だ掴めないものの李恢の勢いに乗せられ、よく分からない内に、馬超はとりあえず謝ってしまう。

「だからそういうとこが駄目なんだよ！今なんで怒られたか分かる！？分かってないよね！でも『とりあえず謝っておこう』とか考えたよね！？」

「は、はい……」

「なんでそんなに元気無いんだよ！全然熱くなってないじゃないか！」

李恢はなおも続ける。

「そんなんで付いてきてくれた兵たちに申し訳ないと思わないの！？君を信じてみんな付いてきてくれたんだよ！そこのところどう思ってるの！？」

「えっ！？えっと、曹操との戦に負けちゃって悪いとは思ってるけど……」

「あーもう！そうじゃ無いんだよ！今はそういう事を聞いてるんじゃないよ！わっかんないかなー！？」

馬超は混乱している。

「こういうときは原点に戻ってみようか。まずはどうして劉備さまではなく孫権どのの方を選んだのかな？」

「それは……劉備の方は兵も少ないし、領地も狭いからいくら近くても……」

「その消去法で選ぶのを止めろ！」

「！」

「ちゃんと前を向いて選ばないと！今から劉備陣営と孫権陣営を思

い浮かべて。はい、どっちを選ぶ？三秒以内！」

「ふぇっ！？あの、えっと」

「三！二！一！はい駄目！全然駄目！瞬発力だからこういうのは！もっと瞬間で行動しないと！」

もはや馬超は完全に李恢に呑まれてしまっている。　李恢はさらに熱く暑く続ける。

「答えられなかったよね！今答えられなかったよね！それは自分が心から『こうなりたい』ってビジョンが無いからだよ！だから消去法で選んじゃ駄目なの、分かる！？そこからさらに『こうなってからどうしたいか』を具体的にイメージしないとやる気なんて起きないからね！」

「そ、それは……」

李恢の言葉の中には馬超の理解できない言葉が含まれていた。しかし、その意味は確かに馬超には届いた。

「その顔。自分でも自分のことが理解できてないって顔してる。自分が何をしたいのか、何を望んでいるのか。」

馬超は李恢の言葉にハッとする。

「確かに……。私は昔から母さんみたいになりたいとか、涼州をもっと豊かにしたいとか思ってきた。でもそれらは全部馬騰の娘の夢であって私の考えなんか一つも入ってなかったんだ」

「いいんだよ、それで。今気づけたんだよ。君は！今！初めてスタートラインに立ったんだよ！もう自分を甘やかすのはやめだ！これからは全部自分で決めるんだよ！」

そうだ、私は今すたぁとらいんとやらに立っているんだ！

「はい、李恢さん！」

「よし、いい返事だ！今君はどうしたい！」

「劉備どのの下に、蜀に行きたいです！」

「全然駄目！もっと熱くなれよ！」

「蜀に行きたいです！」

「もっとだ！そんな中途半端な気持ちで何かをしたいとか口に出してんじゃない！蜀に行きたいです！はいっ！」

「蜀に行きたいです！」

「そうだ、もっと出し切れ！蜀に行きたいです！」

「蜀に行きたいです！」

「よしいいぞ。蜀に行きたいです！」

「蜀に行きたいです！」

「よし、馬超！俺に付いてこい！」

「はい！私のことは翠（すい）と呼んでください！」

「うん、分かった。なら僕のことは修造（しゅうぞう）と呼んでくれ！」

「はい、修造さん！」

ちなみに李恢は羅傑闘（らけつとう）と呼ばれる、先に碁盤状に網を張った特殊な打鞭を愛用していたそうだ。

熱血ネゴシエーター（後書き）

公孫サン

父親は豪族だが母親の身分が低かったために冷遇されていた。だがイケメンで頭が良かったために太守の娘を嫁にもらい、逆玉に乗る。身分が高く優秀な部下にはいかやがらせをし、身分の低い者を重用した。

異民族からちょくちょく略奪をしたり、劉虞に攻められた際に自領の民を盾にして立て籠ったり、清廉で人望の篤かった劉虞を殺したり、劉虞を処刑する際には夏場に「雨を降らせたら処刑を中止してやる」とむちゃぶりしたりとキャラがとても濃い。

劉備のように彼にも義兄弟がいた。
絹売りの李移子（りいし）
商人の楽何当（がくかとう）
占い師の劉緯台（りゅういだい）
の三人である。
李移子は太守の義兄弟であるのを良いことに傲慢に振る舞い財を築いた。
楽何当は太守の義兄弟であるのを良いことに傲慢に振る舞い財を築いた。
劉緯台は太守の義兄弟であるのを良いことに傲慢に振る舞い財を築いた。

究極の料理人

蜀により南蛮が平定され、それにより蜀は後背の心配をすることなく、魏との戦いに全力を注げるようになった。

南蛮から平定を済ませた蜀の一行が、自国の首都、成都への帰路についていた時、事件が起きた。

帰路の途中に存在した大河が氾濫したため、その場で立ち往生をするはめになったのだ。

「はわわ、どうしましょう。

このままだと、帰るのが遅くなっちゃいます」

蜀の軍師、諸葛亮の不安は募るばかり。

このまま主力が南蛮に釘付けになっていると、魏が攻めてくる恐れがあるからだ。

そこで諸葛亮は、成都までついてくることになった南蛮王こと孟獲に尋ねる。

「美以ちゃん。

南蛮ではこういう時はどうしてるんですか？」

「こんな風に河が氾濫するのは、河の主の機嫌が悪いからにゃ。

だからこんな時は、生け贄として何人かの人間の生首をお供えす

れば、すぐに渡れるようになるにゃ」

「はわわっ！？

人間を生け贄にするんですか！？」

「そうにゃ。

可愛そうだけど、そうしないといつまでも河の主は怒ったままで、ずっと渡れないにゃ」

諸葛亮は考える。

こんな野蛮な風習は止めさせるべきだ。

しかし、このまま河の前で立ち往生を続けているわけにもいかない。

どうしたものかと頭を悩ませている。

「っっっ！！

そうだ、いいことを思い付きました！！」

諸葛亮の考えた案とは、よく練った小麦粉でできた皮で肉を包んで、人間の頭部のようにしたものを、生首の代わりに生け贄として河に流すというものだ。

早速、諸葛亮は調理師に命じて作らせる。

その生け贄代わりは饅頭（まんとう）と呼ばれ、それがのちに肉まんと呼ばれるものの、原型であるとも謂われている。

饅頭を作り終え、諸葛亮が河に流そうとすると、突然一人の男が何処からともなく現れた。

「まったく、この饅頭はでき損ないだ。
食べられたもんじゃないよ」

「はわっ！？」

そういうなり男は、饅頭の一つをむんずと掴む。
そしてそれを諸葛亮につきだす。

「見てみなよ。
皮に使った小麦粉を練るときに、水を加えすぎたせいでぼそぼそだ。
しかも、蒸し時間も足りないせいで皮がカチカチだ」

「はわわっ！」

男は饅頭を二つに割り、断面を諸葛亮に突き付ける。

「何よりもこの断面を見てなよ。
まだ生焼けで食べられたもんじゃない。
しかも具材は豚肉のみで、それも質の悪いスジ肉ばかり」

男は諸葛亮を鼻で笑うように言う。

「こんな饅頭を美味しいと思ってるんなら、貴女もたかが知れてるね。
十日後、またこの場所に来てください。

もっと上手い饅頭をご馳走しますよ」

男の名は劉安。
究極の品書きの完成を目指す料理人である。

「はわっ！？
まるで豚肉が舌の上でシャッキリポンと踊るみたいです！
こ、これが饅頭なんですか！？」

「ひょえええ！
にゃんちゅうもんを食わせてくれたんやにゃ！」

劉安の饅頭を食べた諸葛亮と孟獲は大絶賛。

「饅頭だって手間を掛ければこんなにおいしくなるんだよ」

その時！
何処からともなく謎の男が現れた。
「まったく。
中国人好みのあさましい食べ物だ。
劉安、こんな饅頭が究極の饅頭だなどと片腹痛いわ」
「ゆ、雄山！？」
究極の饅頭対至高の饅頭。
史上最強の親子喧嘩の火蓋が切って落とされた。

「あの～、私たちは早く成都に戻らないといけないんですけど……」

究極の料理人（後書き）

ホウ統

諸葛亮の同門であり本人も優秀であったが、不細工で毒舌家のため、一向に就職出来なかった。
のちに司馬徽に高く評価され、周瑜の配下となる。

赤壁の戦いでは重要な役割をはたし、周瑜の亡き後も魯粛の推薦もあり、孫権に仕える。
だが、そこでも不細工と毒舌によって軽く扱われたので、諸葛亮の誘いもあり劉備の下へ。

劉備の部下となれたまでは良かったが、劉備もまた不細工で毒舌という理由で、この不細工男を軽く扱い、ホウ統は仕事をボイコット。
だが、諸葛亮の推薦もあり、諸葛亮と同格まで数段飛ばしで出世する。

彼の人柄を表すエピソードがある。
劉備が戦に勝ち祝勝会をしている時、勝ったことでテンション??の劉備に対して、持ち前の毒舌を発揮し
「他国を討って喜んでるようなヤツが自称仁君ってｗｗｗｗ」

なんて余計なことを言って劉備をキレさせ、宴席を追い出される不細工男。
しばらくしてから冷静になった劉備に呼び戻され、劉備の
「ぶっちゃけ、さっきの喧嘩って俺とお前、どっちが悪かったと思う？」
という質問に
「俺も悪かったけどお前も悪かった」
と答え、平然と酒を飲み続けたという。

このように、ホウ統とよく比較される諸葛亮がエリートだとすれば、ホウ統は矢島金太郎的とも言えるだろう。

親切な行商人

漢王朝はまさに末期と言っていい有り様であった。
皇帝は宦官を重用し、宦官は賄賂を受け取り、国は官職を金で売り、官吏はそれらでの散財を取り返し私腹を肥やさんがために民を重税をかけ苦しめる。
そして、その仕打ちに耐えきれなくなった民衆による乱が相次いだ。

だがそんな現状を憂い、立ち上がる者たちがあった。
曹操、孫堅、袁紹など、いずれも後世に名を残す英雄たちだ。
劉備もそのなかの一人である。
このころの劉備は義勇兵を募り、義妹である関羽、張飛とともに義勇軍を組織したのだが、実際のところ義勇軍とは名ばかりであり、食いつめ農民の集団でしかなかった。

（名ばかりの）義勇軍を組織した劉備（真名を桃香という）たちは、劉備と旧知の仲である公孫サンのもとへ向かおうとしていた。
その道中、劉備の義妹の一人である関羽（真名を愛紗という）が、劉備に話しかける。

「姉上、お話ししておきたいことがあります」

「いったい何のお話なの、愛紗ちゃん」

「はい、姉上。
我が義勇軍はほとんどが元農民ばかりで、実績も無ければ後ろ楯も無く、あるのは志のみです」
「うん。
たしかに今の私たちは弱小勢力かもしれないけど、みんなを笑顔にするために頑張ろうって気持ちは誰にも負けないよ」
と、胸の前で小さくガッツポーズをする劉備。
「姉上の志は立派なのですが……その……」

「……資金が底を突きました」
もともと劉備たち義勇軍は資金に恵まれていない。
劉備、関羽、張飛の三姉妹は勿論のこと、義勇兵たちもたいして財産を持っていなかった。
さらに、資金提供をしてくれるパトロンもいない。
一応、出立時に村人たちから寄付金や食糧を援助してはもらったものの、せいぜいが、なんとか公孫サンの治める街へギリギリたどり着ける程度しかなかった。
その上、義勇軍には人の十倍は食べるであろう張飛がいるため、

あっ！！　という間に食糧とそれを買い付ける資金、そのどちらもが底を突いたのだ。

「鈴々に関しては食事の量を自重させるとしても、このままでは公孫サンどののところへたどり着く前に食糧が尽きます」

「じゃあ、途中の村とかでまた寄付してもらうしかないのかなぁ」

「ですが、その村に義勇軍相手に援助を出来るだけの余裕が有るとは限りません」

関羽の懸念はそこにある。

武器を携えた集団が資金や食糧を求めてくれば、村としては断ることが出来ない。

何故なら、この乱世では腹を空かせた義勇軍が突然盗賊に変わり、略奪行為をすることなど珍しくもない。

もちろん劉備の人となりを考えれば、そのようなことを許しはしないだろうが、そんなことを村人が知るよしも無い。

だがこのまま食糧も足りぬまま行けば、そのうちに腹を空かせた義勇兵たちが勝手に軍をぬけだして、盗賊化する、なんてことも有り得る。

悩む関羽に、劉備が一つの提案をする。

「いっそのこと、私のこの宝剣を質に入れちゃおっか」

その提案を聞き、関羽は慌てて制止する。

「姉上！

何を考えているのですか！

その宝剣は姉上が中山靖王の末裔である証です。

それをよりにもよって質に入れるなど」

「でも愛紗ちゃん。
このままだと、せっかく義勇軍を作ったのに、かえっていろんな人に迷惑をかけちゃうことになるんだよ？」

関羽とて状況は理解できている、それこそ劉備以上に。
だが、この義勇軍内では最も学がある関羽といえども、あくまでも本質は武人であり、このような困難に際して、ポンポンと名解決法が浮かぶものでもない。
そして関羽は、自らの持つ愛用の武器、青龍偃月刀を一見してから軽く嘆息し、苦渋の決断をする。

「仕方がありません。
私のこの青龍偃月刀を質に入れましょう。
ここから公孫サンどののところへの道中は、そこまで治安が悪いわけではありません。
しばらくの間はただの鉄剣を使用することにしましょう」

「だ、駄目だよ愛紗ちゃん！
その武器は大事な物なんでしょ！」

「心配ありません姉上。
ちゃんと公孫サンどののところへたどり着いたら買い戻しますから」

「で、でも……」

その時だった。

「お姉ちゃーん！　愛紗ぁー！」

どうやら、少し前に関羽と劉備が話し出したころに「難しい話を聞いてると眠くなるから、この先の道が安全か確かめてくるのだ！」と言って斥候として先行していた張飛が戻ってきたようだ。

劉備たちの場所からは、まだ張飛の姿は黒い点にしか見えないほどの距離があるのだが、張飛の大声はしっかりと聞こえてくる。

「少し先に行ったところで、妖怪を捕まえたのだーー！」

劉備と関羽はしばらくの間、張飛の言った言葉を脳内でよく噛み締めてみたがまったくもって意味が分からなかった。

困惑する長女と次女を尻目に、三女は小走りで姉たちの下へ駆け付ける。

右手には愛用の蛇矛を携え、左手には自身と同じくらいの大きさの黒い塊を、引き摺りながら持ち、右手を蛇矛と共にブンブンと振りながら帰ってきた。

関羽はいまだ混乱してはいるが、とにかく状況を明らかにしようと張飛にたずねる。

「り、鈴々、妖怪とはいったいどういうことだ」

おそらくは、張飛が左手で掴んでいる黒い物体がソレなのだろう

とあたりをつけた関羽は、劉備を背に庇うように劉備の前に立つ。
張飛は黒い物体を前につき出すようにし答える。
「さっき歩いてたら変な妖怪がいたから、殴って気絶させてからここまで引き摺ってきたのだ！」
「そんな怪しげなモノを持ち帰ってくるな！
あと、姉上！
気になるのは分かりますが、私の後ろに居てください！
得体の知れないものゆえ、何があるか分かりません」
関羽の脇から、ひょっこり顔だけを出していた劉備に関羽は注意をする。
「で、でも愛紗ちゃん……」
「駄目と言ったら駄目です」
「いや、そうじゃなくて！」
そう言うと、劉備は黒い物体を指差し
「もしかして、コレって人なんじゃないの？」
予想外の言葉にギョッとした関羽は、あらためて、よく目を凝らす。
その妖怪は、頭が大きくだいたい二頭身ほど。
口は横に裂けているように広く、口紅を塗ったように真っ赤でまるで血を浴びたようだ。
そして、曲面を下に向けた半月のような目は、気絶しているはず

なのに開かれたまま瞬(まばた)きひとつしない。

「……」

「……」

「……」

「ごめんなさいなのだ！」

「義妹(いもうと)が大変ご迷惑をお掛けしました」

「すみませんでした！

あの～、お怪我は大丈夫ですか？」

三姉妹が口々に謝罪するが、行商人をしているというその黒い男は気にした風もない。

「ホーホッホッホ。

まさか妖怪に間違えられるとは思いませんでしたよ」

「本当にすみませんでした！」

「いえいえ。
お嬢さん方、お気になさらずに」

そう言うと、自称行商人の黒い男は被っていた帽子を外し、叩いて砂ぼこりを払ってから再び被る。

「ところで劉備さんと関羽さん。
浮かない顔をされていますけど、何かお困りではありませんか？
差し支えなければお話しくださいませんか？
もしかしたらお力になれるかもしれません」

すると、その発言を受け劉備が答える。

「実は――」

「――という訳なんです」

劉備は黒い男に言われるまま、事情を説明する。

「ホーホッホッホ。
そういうことなら私がお力になりましょう」

そう言うや否や、男は指を口に当て、口笛を吹く。
するとどこからともなく一頭引きの馬車が現れた。
幌(ほろ)もついていない物資の運搬用の馬車だ。

「これを全部あなた方に差し上げましょう」

馬車には中身が入った大量の布袋が有り、その数は二十や三十では足りないほどであった。
関羽がそのうちの一つを取り上げると、ズシリと重い。
いったい何が入っているのかと、関羽が手に持った袋を開ける。

「いったい中には何が……！！！！こ、これはっっ！？」

「どうしたの愛紗ちゃん。
中には何が入ってたの？」

そう訊ねる劉備に、関羽は黙って布袋を手渡す。
劉備が袋の中を覗き込むと、中には大量の銭が入っていた。

「こ、これって……」

「他の袋の中身も全て同じですよ」

驚愕を隠せない劉備に行商人の男は事も無げに告げる。

「こ、こんなに大金を受け取るわけにはいきません！
それに私たちはまだまだ弱小勢力で、こんな大金を返せるあても有りませんし……」

「ホーホッホッホ。

返す必要などございません。
その銭は全て『差し上げる』と言ったでしょう」

「で、でも」

さすがに金額が金額だけに受け取ることを渋る劉備。
もちろんお人好しの劉備のことであるから、騙されている心配などではなく、単純に申し訳ない気持ちから言っている。

「是非ともお受け取りください、劉備さん。
後々になってから、お金を返せなんて言いませんから。
私にとっては、お客様が満足されたらそれが何よりの報酬でございますから、お金は一銭もいただきません」

男はそこで一旦、言葉を切り、ただし…と続ける。

「もしあなた方がそのお金を世の中の為以外に使おうとしたら、そのときにはそれなりの罰を受けてもらうことになりますよ」

そう言い残すと、いつの間にか男の姿はどこにも見当たらなかった。

「あの男はいったい何者だったのでしょう……。
もしかしたら鈴々の言うように化精（けしょう）の類いだったのかも知れません」

「ん～、でももしそうだったとしても、私たちが困っているところを助けてくれたんだから、きっと、いい妖怪さんだったんだよ」

劉備たちの場所から遥かに離れた岩場に、先ほどの自称行商人の男は腰かけている。

「ホーホッホッホ。
さて彼女たちはちゃんと約束を守ってくれるでしょうか」

彼の名前は張世平。
取り扱う品物は人の『ココロ』。
困っている人が居るのなら、老若男女貴賤を問わず、誰であろうと無償で助けてくれる謎の行商人。
どんなときでも報酬を一銭も受け取らず、常に笑みを絶やさない彼のことを、人は『笑ゥぎょうしょうにん』と呼ぶ。

とある城の中。

「本当にこのハチミツを妾(わらわ)にくれるのじゃな！？
後で返せとか、金を払えとか言っても遅いぞ？」
「ホーホッホッホ、もちろんですよ。
そのハチミツは袁術さんにあげますよ。
ただし、食べていいのは一日に匙(スプーン)で三杯分までです。
決して四杯分以上は食べてはいけませんよ」

旅の行商人から、大好物のハチミツ、それも大きな壺いっぱいに入ったモノを貰った袁術は、ホクホク顔だ。
早速、そのハチミツを食べようとする。

「七乃、早く匙(スプーン)を出すのじゃ」

「はいはい、美羽さま」

お付きの家来である張勲（真名を七乃という）に命じて、匙を持ってこさせると、袁術（真名を美羽という）はハチミツを一匙(ひとさじ)すくい、口に運ぶ。

「おぉ！
こんなに美味いハチミツは初めてじゃ！
今まで食べたことのあるハチミツなぞ目ではないの！」

そう言うと、袁術はハチミツを二匙、三匙と食べていき、ついには四匙、五匙、六匙と、張世平との『一日三匙まで』という約束を

早速破っている。

「美味じゃ、美味じゃ！」

「さっすが美羽さま。
ついさっきしたばかりの約束を、舌の根も渇かないうちから反故にするなんて。
この三国一の極悪人♪」

「うはははー！
そんなに褒めるでない！」

といった風に、この主従が噛み合っているのだか、いないのだか分からないやり取りをしていると、どこからともなく声が聞こえる。

「袁術さん。
貴女『約束』を破りましたね」

袁術と張勲が声のする方を向くと、先ほど部屋を出ていったはずの張世平がいつの間にかそこにいた。

「な、いつの間にこの部屋に入ってきたのじゃ！？」

張世平は、袁術の問いには答えず話し続ける。

「ホーホッホッホ。
約束をしてから三分も経たずに破るなんて。
さすがの私も驚いていますよ。
それでは袁術さんと、連帯責任で張勲さんも――」

そう言うと、張世平は右手を袁術、張勲に向け、人差し指で二人を指し示す。

「――約束を破った罰を受けてもらいますよ」

ドーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーン！！！！！！！！

母である孫堅の死後、袁術に庇護という名目でこき使われていた孫策が、袁術に対して反旗を翻した。

まったく予期していなかった反乱に、袁術軍は次々と討ち取られるか、逃げ出すか、降伏をしていった。　そして孫策は袁術の城へと到達したのだが、城を攻める様子を見せても何の反応もなかった。

不審に思い、隠密に城内を調べさせた結果、袁術と張勲がどこかに消えてしまったため、指揮を執るものが居なくなってしまったと

のことらしい。
どうやら二人を逃がしてしまったようだと孫策は考えたが、気を取り直して堂々と城内へ乗り込んでいった。

孫策が、城内で袁術と張勲のよく居た、謁見の間に入ると、そこはもぬけの殻だった。
誰一人居ない室内にある、袁術が普段から座っていた座の隣には大きな壺が置かれており、中にはハチミツが入っていた。
孫策は、おそらくここで呑気にハチミツを食べているときに、自分たちの反乱を聞き、慌てて逃げたといったところだろうとあたりをつけた。
そのとき、孫策の顔の近くに二匹の小さな蜂が飛んできた。
孫策は、右手に持っていた抜き身の剣を振り、瞬時にその二匹の蜂を両断する。

「ハチミツの匂いに誘われてきたのかしら？」

孫策の袁術と張勲に対する復讐心は城と領地を奪っただけでは収まらず、出来ることなら自らの手で二人を処断してやりたいと、内心いまだ怒り狂っていた。
その後、後からやって来た周瑜に「孫家の当主が護衛もつけずに～」などと説教を受けた孫策であった。

ホーホッホッホ。
袁術さんはハチミツが大変お好きなようでしたからね、いつでも好きなだけハチミツが食べられるように、蜂にして差し上げました。
張勲さんも一緒ですから、きっと寂しくは無いでしょう。
おやおや、これでは罰を与えたはずなのに、かえって彼女たちを喜ばせてしまったかも知れませんね。
ホーホッホッホ。

私の名前は張世平。
人呼んで『笑ゥぎょうしょうにん』。
ただの行商人ではございません。
私の取り扱う品物はココロ。
人間のココロでございます。
この世は老いも若きも男も女もココロのさみしい人ばかり……。
そんな皆さんのココロのスキマをお埋めいたします。
いいえ、お金は一銭もいただきません。
お客様が満足されたら、それが何よりの報酬でございます……。

親切な行商人（後書き）

あれ？

最初書き始めていたときは、行商人をしている張世平が主人公で、ヒロインとして、狼の耳と尻尾が生えていて廓詞（くるわことば）で話す蘇双を出す予定だったはずなのに……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3720r/

真・恋姫†無双 短編集　転生者たち

2011年9月30日17時24分発行